續世継第八

612
シ
4

612
シ
4

九州大學圖書

九州大學圖書館
昭和 24. 3. 19
182183

續世継第八

源氏のみやたち

花のあるじ

ねしは

月のかくるゝ山のは

はら〱のみこ

源氏のこやまと下

御門様にあかちありハただしきね中に書家
やすらうの御ことゝあおくさし〻
後之条院様女御よて侍従様宰
相基平のむすめ社おもて勤しつ
其宰相なし小一条院の御子ありおハ
し其源氏のこやまとこそ御名ハ
基子女御こそ申しさにきこし中より
てハ書家なま文章家大義ヽ御家な
中申しておりきこなこと信様へく

めでたうおはしまして大殿ハ八十にあまりま
くたいきしもしらくまそやのし給ふ
うるは見えりおはしきさてありなからう
らのつくまもつかり給ひとうきく給
し良頼の中納言のむすめのくしみ
きうんくちたり女御もおはしく御くら
しくりしおもしろ文こそくにみ平等院
覚僧正行尊そこ三井寺りおもしろを
しこ在まくらす験者にておはせし
つかは関白なる家礼おはします

大峯くらしまいりうちとりて三井寺同く
山しるとくしおとろひしやむひく白
河院鳥羽院くらつす護持僧りしお
くしき仁和寺女院其女御まかで
まやなくつまかん御抱の年長りきり
てたこらを給くふくろいし大まりた
もしまし給ふりこの僧正のいのりに
給ひまはおしろてそこくさ給ふく御
かうまてしとてまろくてそはそくあ
小弁なおもりしをのつまりしものから

きくわたさせ給へつまこと宗ふらてしてさてた
もゝのつゝまとしはしへうき給しか僧正
うらみ見りおはしましける集をそおほしお
ありけるとよろこそおもひ給ひき笛のね
いまやうして

菜の庵とちすみ宗修しことひん
りしわ岩屋も神ならめなりけり
あさしみえつゝはしくきく人おほれて
さくらはへのさかんやのしろへろお
かならずく後冷泉院にさはりしく

世をしろしめすことふことしまこてさをまと
升て給ひしすつり後三条院くらゐつかり
つゝき給くのち七月七日まゐらへまよ
したあさましきまゝみれなく給ひ
りつゝめりあやしきことと山にゆく
これからかりまゐる人ゆめ
なかむしかみまへ引きまよりたまひかいつゝ
ふへまうしなりへしいと御心もすこしま
ゆりめしくんむしてよろしもおりつく
るまゐりまゐらせよりそまゐりゆるせさせと

くらくしも勧修寺僧正光明山の僧正
など申ておはしましき女御殿御はら
には御子あまたおはしまし宮と申し延
久之年二月にむまれ給ふ同じ年
十二月にさとしゆかせ申しける宮
にならせ給ひ永保元年八月に御元
服せさせ給ふ応徳二年十一月八日十八さいは
たゞしみつきはを給ひて平等院
僧正も女御殿のきさきとなりまし末文のには
いまだしこもりたる給ひし御かたちうつくしく

おほかりけむさるへき御心のことなかり
給ひきさし侍りし
たりけるや其の人なのこと
それにも伺ひまゐらせたるものかは
と申しけるを返事にめさと
花よりもさくらの(?)をとめて
ちりしその春をのこりけれ
ともうけ侍りし是も白河院なくしさ
とのはらより後二条殿関白二男
御子なたる東宮の御ゆかりなる

第三の御子おはしし輔仁親王と申し
し事延久五年正月に生まれさせ給ふ承保
二年十二月に親王のせんじかうぶらせ給ふ
御子いはけなくおはしまして詩なども作り給
ひし事も中務の宮の御あとをつぎ
給ひし事よく似給ひしとも聞えさせ
給へりつる円宗寺の花を見給ひて
うへ（上）とおぼしきこともなかりけるに
くれやよひのころにもてなされてひとつうたん
ことを見るまへるにや、いと哀れにきこえし御
かみ（紙）も、みだれ給へる事もしのぶることも
あそびしまうし（申し）集に輔仁のみこの御歌
をかうぶりまうして白河院よりこそくもん
おほくこいふるることあら（ば）まし
をきこえはこまとまりさんけてまいりまゐらか
何かのことも（し）を（く）さをおりまさしく
うちとは知りこしとるべきはならぬ
給ふるかし（か）のことすこしてたえなんを
なりもそれは（も）なくこそまへりなし
はして思（ひ）やばからされむとまつりけるまう

を中御室と申しておはしましかのつゞきよ
ひさしいはまへにそあまたのてまくら
をたまとくわたりいひすぐしも見
しかれは御子なまとつけ給ひけるの
にをのしつきかへり人はなほ申と聞
すゑしまうの仁和寺女院の御はかせ
あまた給ひけるはかのこともわすれ
られのあまし
二宮御子中務大輔大納言の
はむそめのゆかりにおはしてうれ

おもしろくしたまへりし村上源氏なとを
ところへとこそ申さまりし色をあはれ
給ひしつきておきそうしたつまりしに
わか家と申しは御のくさにさ見えあなたゑ
うたへきさうしてみたくへよむくれたるひ
こけはめてうむすめのあれおなしきさ
せたへ文詩つゝらうてるとふ給たまひ
たうり座ほんはくしさうかはらこ
ろこまもしまの御さしかさりける
をりこゝろこてありきしてさまつとを

よよのうたを好人はむかしよりあまた好く
たしかにその花のあるじとなりて
ひとつ二つのかほりもとめて行
かしこの見しらぬあるじは、ちとの心やみ
ゐ中ひとへまゐるともなくて花など
あはしとは一つ文は見しらぬところあ
中好みもとめてあるところにわかし
十二なりたちまちに人はさみしかりける
何を好み白河院の御子中
さき好みく深く基俊の位

なにゆゑのまのあたりにしられゆかし
ゐてまゐるあはれのあはれとこの御世
これらをよしとかくせさをはる場
ひとつの兄弟のまいりくさるおもしろの
やうやくはるかなりてみさてまゐる
人よ好こはわが道のよろしはなやかん
あらまほしき元永二年の秋ちかくなりなん
うれしき秋のころなり十七や八なん
くはしく源氏の性質なり御
ならびに仁と申す人ありて

日に位の中納言になり給ひてのち十月
権中納言になり給ひてやがて中納
言中納言ときこえしに御
子の御子一人おはしけるは
おとゝとにて位よ位なりし人
聞えし給ひて後にこ位中納
小野宮の入道中納言中
納言といひしありてやなりて文を
次の年保安元年にや給はりて大納
言になりて給ひしとかく右

左大将になり給ひて後そ大納言の
くらゐ中将の人いこまとかん見ものに
しありてしかの御白河院花見
せ御幸にて御しかし右衛門督は笑ひ
殿上人のつまなとて世こそりて見え
聞えし給ふ
位様ありていさめきて大臣
おいゐろくしてち落葉と言
て侍ったは宗麿のもと給
りし葉し

なやましきにそへて人のしるま
つもりしあはれてうちしゆすりて
おもひすつるにいとしあはれなる
　つきまつ花のころにまたゆかれ
のとかなるをちかしらかれのみ
とりまつ御管絃はいりもまゐ場
かうしけひく箏の琴御あそひみ
いまこし給ふもしおのかうな
みくし御手もろともさ給くしお
しのひ寺くのくをはよもなを

中納言にありしおもひわやこのみこ
しき給ひしい法皇の御そはのてる
とり給いさうなとやうらき
くやおはしけん悦ちきの揚しけるい
ろうく深のへつまなれ文ちさこそも
きてくまいさうまし羽をつるゝ法皇の
御車のありけるのゝ給ふくこ幸
ありきたりしすみやかれ御つ
かたを御りしてしなかりや悦せん
はつものありとまいつゝ給くあるすゝう

し貴面やんくくれひとりおりく
はめしくしたき場ひくにりして御
とうちくくつおりし申すうきのく
しさまよろつおよくあてまいらし
とへくくつまゐらし實錦のおもくいさうく
ゆんくくのきくとりおりして明夕剋
あそしはまちし給へまてた当来待まいらせ
まいらせ候やよ月又日大殿
あやめ草わさくも気つこはあれ
宮よいころゆりかへましとまいらせ

あまし御申場つるもいとうろうしくせ
大しゆう殿さしのかはらゆんとうこれ
こ場ゑへ御まゐらせ候のまうさみし
うきあしのわしるとこゆうね徳焼場
く甚候しそくまいらせ候まゐらせつ
たむしいゆまのちとしちくく候ぬ
貴もとなりふらて忘れかしもこいのも
めるこもうけならなるへしこまい
こころそさひ忘れしきつめきまゐらせ
かうしうましくうるてくろめれ

白河院ハ御さいゐのうちてさへつらくあまくお
ほしつゝ元永ころひあとまゝてさき
まししさいなかん獨なりしやうし給ひつゝ
ふかうりゝろ世ハりあるん鳥羽院これ
これうのおほくあはれさも御兄悦
ありくりもてうくもえもつてておかし
ますらくへみこまうりさいせさを給く
よの御ありまりてゝゝあそうあてゝ忘
わしゝ悦うつうゝ悦をめ人ゝ文
きくこゑうの人ゝを見物ゝゆゑのうゝう

忘れうしのうりはくもとうつちゝゑ進て
行うとはおちろへまなあへしとよよ忘
ゑみ人たありやこのよゐゝろみはそゝ
まうゝつまゝろまよ見いるゝつゝひさそゝろ
いつ見へしゝうゝちときゝろはうひろす
ゑんとゆう忘りんの雑多ゑしてひく
施人へりなもしもこの御いゑの人
なうまうへの御きうしとへきここそならまう
殿上人となゝえてまいつまつあそひ
ありまゝうはさうまゝみゝ百大夫也

よりいつきくらきたりしあるよの朝夕すれ
つかうまつる弟子をのぞき心ものきぬい
まくらくいかゝおほしめしてゐとうちわ
人まくれありひとりをしたて伊賀大
夫六條大夫さしいふとくもろ人とも
あり平しかん詩つくりものへ人とも
うとろとも越後のめのと小大をな
といひくるかな女くしかん家の女
房なくなりきんちまうりくは
くさつまんつなといふことりつゐめを

らるくりし三条のらせんかくぬまきや経
少将のさしのありしや
あはれなることしつのさやとし
くるひくらかりし中務少輔實定
といつものはゐれるのまゐりて
さるともつゐく
月はむ世何為はとせ世とおもはゐ
しつきゝるまきはいとらくつきぬる
なんなきとろしあひ給ふするえあるこ
きたり

あしのはやことおもひしみてやまと
なにはのかゝり大和殿
八重にて秋あん紫のいろのうん
とつきさきなかゝり越後のめのと
ちりかくしかりつるやうさなる
とつきさらなるをつちまてか能あらし
きなにはすへらゆめなるしおらく何
まくらうめ越後はいさこ若いらの人に
つきまとひみくうてしれやさしく
しかへくらへつまなきるゆめうつゝ数

ちしとこそきて何しつ
ゆしちは
大和殿こうわらくおかりしてゐるめのもとく
きしろ人みゆきんてもあておかし
さしいてろ人のやおりしかんこよ
よしいとめうつりくにほとものの
くつまるとりしつをらいてさんやま
おとすましやさしくもおかしき
むしおろくこよしれうてしろうく
すむうとやしかりつふさうみのひさむもを

なかゝなりしほとにハ二つはかりにて
いまハとてこそはつてはのかそへまゝ
つきもせすまことに見給へはあはれに
うらみ見つゝこのむき見給ふらんなほも
小児をおもひ給ふこゝろていきほひた
まうちあしもとまくなりしに云あくま
あらぬ人をなにしもあらまし亦其兼の
うこんの大将うちもせいつまくまゝて
かく見ゆる女すなはちつとひあはれをはしあ
まよひしつゝなかくてとしし給ひわた

つもあはれをし月おほよそにいろま
いく御膳所なとありてさへましきなり
大まなしつ人をもよかるくつらなり
ある御車なりしまいつゝかうしてうま哉
らやうしあはれいつゝこのむ侍くよの
つまゐうへ入りてかまをもてあそひ
給ひしひて箸を取り第うち人のきし
つまにいとこしてひま第四まなむし
うし給ひ事あるおもひ千鏡ころ
ましてうちひくるゝ中あかいかうき

ふるや女

かゝるうきよのものとてしゆみ
こゝろうたてかなしきみちにかきを
やくみちのくさのつゆすきてそゆへ
にこつきこひておもひけるよりきにつき
みちのまろつかたましかこもひゆふかく
をとこをとこ〔あ〕りのなかにあるけれを
たのもしくたえくるたちのしく行
しらぬとくはなりへたて女あり
まつはゆえにのみきのこのつまのごとも

み中ねのしらひろこものとゆきくれ
うくいてにほとくなりしておくていへゆ
うたのゆふしひのこゑおもひなうあるま
つまかりしやおつりんとおもてしかそ
鳥羽院くゝ井あん御とふかり大納殿
きうしとうかりやつまくあてつきゝさひを
ふしらしとやうかりうしろみあはれむしを
いつまくみし宇まて御つかへしは
宇くゝうまてもつふうらてまいきさくら
人りあかきらまくろよあかいなへいて

いえくつろもえりてくらゐしめかりな
つましめへつまかりしかりこえしむかろ宮
く御消息しけり給て
らうの御つほねのうちゑひてまゐりのを
りしのまの夜をまゐりさうえん
しけるあかつきさいかたかをのかりおい
よきはさよくしまいつまてひ給かりつ
すつるひしきて給ゐりてしもおい
しかたかるしむしのみくしの
れよりことゝなかりやしいさきてる

とくなしおかきてまたれてあまるまたなる
ふところへつましかやまかりこともおりしかる
あやとりいろこのゝ給ひてあやうくて
のくかよくをすへさて御いたくて文や
ともそりつまくうこよむ女房からくし
をりきたまとらくのめのとの車よりてう
女なとゐりむくさしのひかろあくもこて
しうつりあかき陽かろつ御いの女房とも
をおとこのりしちえかろうてなと御
其きてつくかりやあたきてしくれ

返事なとし給ふる小大をめしていはく
これを賀茂にこのよしきこえさせよとて
ゆふしでをつゝみて参らせしたまひ
さておほしめしもあさ参りて中納言
君をたひて参らせつるを申てなくなく
つかうまつりける歌小大進
なけやまのあさきこの下の郭公
つねにさてつかう給へといふを
なをきゝ侍しくちをしくおほしく
ようて泉式部うたをつゝみてとかや

うちに侍し侍ちのたくて侍しも中将の
大ねのさくおはしもしおはしてかうとのさま
いとくちらしいやまうろそふ人そうみ
いふにまいらせ給ておほつけとも給はれ
たゝしそともえそはえこそのかし
うしろかさうろこのこゝろまへくるる
はあらくもてきて侍りつ
月のくるゝ山のは
中宮におはしこあるまゝ給ふ所にして少将
大かたのはかなく人ありの女房たまふ

圖書

こまといひしたりけるを大和のゆかりせ
ら頭をとりかへおとしてみえ其人のま
まな道とくら見人つゝみてもろかす
おしけるさしてらすゝしてまなるてとおり
あ道とみやすまて一日二日をなてあとを
ひとくかりまいりゆきかす道くうや
こくかとあり女う道ぬといひかへて
いはしゆきてかれとも大のゝきゝおと
しくらしそのを尽きくとうあやま
らうしあのしくおもひつるゝよ鬼うし

とかくらしく道すんいうきあしまて
つまとしはくくなきあるかくろれとみ
御簾をたかくしやこのいうとつき
くゆくくそりてしるとみ道て
そりへ山をあて有ほとのみてくて
まろうて有しく道とむすん
とそうおくろうくりくとり大井
有まうとありていとうのしくありひとつ
らしわすうしるん
又ある女ありけりはくうまひとりおこ

まいらせつ絶入しなとはいふくてものゝけは
おもひやるや見なとおもひとて其人とてさまく
このおとこの御よのおとこをやくなち
おしなきとくへつゝくいつくもさりてくを
ありてもこつまおしくやうて我ものかさまいそき
あいいそしもなおみゆきのおんまつと
かいなれへしむしうこの御門のたさ中
勢の御むまこといふくらふまゝせ
ろてろすくへくともそおもく見ゆ
めもとワつみなとありともつひすなるもな

とくありなる姫君こそおもひあはれの
このはたうりいあらておつひめなを
ならさりいのおもくかむ人の中まつらる
まうせりしかの大きさとしろとなん上西門
院ありしろおもしきて始のひてなとも
むまのみかりもておほしなろり日
あつお殿ぶのひくうなすし始なるよ
てあらいき始なるとへやまさとくてう
女院きた始いまろ杉院ありいつく西ひ
ゆひく夜と人なむ車なとつけりくむ

うへなとせさせ給ひてやうやうさふらひ給ふなる
殿ゝうちのみかとの御かたへとこうすゝ
めしまいらせいつしのまゝてんより
うちや御つかひなとようちかはさせ給
さて石清水の宮をまうてさせ給ふ祭
清きとききし別当にまうけなとせら
れふうしてはきゝて供奉し奉りまいらせて
りうさかう御あくらのうへにのせ給ひ
まいらんとて御ゆるしをうちつん侍る
さしよそゝきしまうけ給はらせよと御まゐりよ

いまそ給ふよしとて云承りおめて
くもゐる

さいつひとさむくのたまへはあるを
なにしおはゝひとをまちみむ

ときゝつゝさせ給ふとは神のゆしろのさん
かく御ゆるし給ひておもはさきさせ給ふ人々
小のつまさせ給ふ御はるゝときなとさいさゝ
陽なをもうちけるも人はしつかなりつゝ
なかはんさしてつゝらのものゝあはれそ
まとうきの給ひんあへ神もしのさて

みかくしまをとなりきのとこしさう世給ゐの
こゝやうしおはしつゝらくおはしますかゝり給ひ
正念往生極楽とぞのひとゝうへ給を
給ひける御孫あまたにもありてうきなるすくう
宇給ひけるに地蔵給ひけるおほいとの殿
みかど大ねもとにおはしましたるれたゆくそて
おいしき仁和寺にいますのとみにほよ山
にとつきけりて通ひ給ひ東アナまゐます
まくやうを湯入りんちくまうて御
くありし給ひけりそこには山しに

らまきさうさてとこしたりやさきくるみて
給ひける岩倉たちきしつましいて忘かし
なえさしうそてそこにのもしおはしし給ひて
うかしをみえますきましつくるをさきさく
かくうんおりける後よめのとゝ給ひて
みける花ありさして

わきいてゝ君をまちわひむつきをとつゝて
ちりうん花は又とも東なる華

とらかんまひけるとめゐいはむゐゆう
にくこひあしを給ひし山ちね[illegible]を中のむまゝ

うやのかみまく唯人ありけるがまゐりこのよ
みはめでたくすぐれたるなさきとあれ
ともなかりけるてあつくすかりしそて
まつりしありまてけるもあくやまひしまゐよ
うすんいとうありやまひてのあそのを
やむありしのおほくあしさくねらぬし
きくゆうこう哀なりけんまま甚まそうす
まうしてかしこひたる人
いはくとうかく見えもうん歌をとこめて
えかりさしみし山本て日

このみこの御子たりいまそく後徳僧正とやく
仁和寺ありあるしよ鳥羽院にくしあつ
はゆき給しと来しにて戒師ありおそしよ文せよ
を僧都のまことにて見てまて給きつうふ
もたるりしみや佛しりおかい殿ありしくつ
やしさき給へるとや御むま縁いおいとの
むとうそうけり伴おめのつまりて下さく
てまうのうちを如しこまん御宮とやし見
みやおもとらん又行家まん大龍つのむを
めのうしけり御文おかりとうかつてしこのは

むかしよりやあまたゝまひ候ふの
うけたまはりおもしろからず候ひきおほ
ともいへとものいくへのよろしからぬ御ことに
くわしく見るひとゝも女房の文とて
ちらされときまでゝもかきあつめて
庭のおもてにもすやみまし
やさしし
さて御所の
まさいの女御文ながらおいさみて御所
うちうちこまかに給ひちらし御

代々あまた続き天よりもちひあやまち
いられし得られちらしふらつまおかし
まうとおほくさまじ続白河院のきさき
きさきの女房みちらの御ぬらし薫香
殿の女御せんうつしまたらつ続し仕への
いはまたもおゆる女の文も天仁元年志
も月の文ひとつありあひさまひて秋の文と
まし続まて御たらしいふるきりのおもしろん
もちちしとりや得たん香の実とも やさし心
も見つけやおもしろん賀院の秋の文と申も

おもしろかりつるを申させ給へは我つ
おほしきこえし源氏のみかとのことなりしか
しとめのなかりおもひと申しておほ七十
みあまりの事ひくおもしろときこえしおほ
らさまのみかき上西の院をさ瑞給ふは
其つきあり院のさまことなりて殿上人な
ところまてさ給ふりとのまなのことな
みくつろかなりし人はしろことり
は車なとこそあやしのさまの東院のおほ
してさくらはなそ申させおこなふこのおほり

いかはかりしきたえりつるを給へる御衣服
もとなくうへにそのつらともこゝろ
えはしぬおもはくを給ふとやらておはし
しきさめかりしを浅黄と日記ありしかなる
ことしあなたまつりつきなかりけるとおほは
うきく花ちりてあはれてのかすみそそ
まつらせ給ふもおさうくおほしめしま
しめかりしやはらかなきしつらの御
衣服のさなるとさまくまろさうらふへ
し位まつて衣服を給ふるにてまたなる夜

みえてまことにえりしことわりしさらん世の位人
は黄袍ぬへくまてそのころもしてあるは
よろしくへつまくつくろへる詩りとこそきこゆみな
くもとあひきてし秘せかたる色しを給ふこと
いふへくもありあらきなる事は衣りしあるな
やうきく侍り緋の色しるのさうさきなる
ともにたなをらへのきぬの心なるへしか
やうの作井りしある人へかさまなるはつるを
すん衣いもの官位のまなりしてくる人への官位
といふ位といふるあきとときくゆへ人への位あ

きの衣きしてさうらふくはあるへきことの
人心あはすきくは位はそれの衣きしうら
ぬ位は官位の衣をきるたるへしさては
し上官なしいふらふしもてなしとあけ
をあしく法さる人へしさく侍なる佛の
みちしりうるへしかはこのころうらふきを
きくつま仁和寺の宮親王ときこえし
くる内は白河院のみこなりあらは御
くしあらさを給ふやくあとさりな
らを給ふとりてこひしくしまとおもひし

ゆきは文より親王の宣旨をかうぶりてこそ
給りしおほせにしたがひておはしましけるは
これ尊氏御子師明親王と申給ひしまで
ちこりおはしましてはゝの御名をえさせ給ひ
あまは法師なし後も親王のきんしを
ふうま給ひちと其ころやうつきさそてまはり
もとしけれてしのをやいましいつても親
王の御名をえなるをとも親王をみとも
しとつまをうつまのち二条のおほく出家
のちの親王との給ひめろこそおほくせし

ゝ覚法ゝ親王と申し給ひし六条の后の
おとこのこむまれさせ給ふとこそまうさまし
つまし法性寺のおほしの記して御腹つら
みおもとにうまれさせ給ひぬることの御子
関白うしきとつくらせおはしましていとこ
かまなりしこせむきしろをおほかき
よあきさうしつたなる人々おほしくら
大言のうちくうすひ給ひて大事り
もおもしろうこゑせんをあゝしまくる
とうき給とゆゑし給きこうね大師

すゝてつ来りたてしあまはあんやれ
しわさうもちつきてうよあさおもしを
あつうしや人まうて給ふうちって
ゆくめなおよき世中とおもてあまて
いはくもくしのらうしそてまま
とよ見さ宮へまゐらう横川覚超僧都
まいよ得律のてとゆめと見つ外と伊
よろくたりひつくらまてあとまいりおほ
御斉まう又仁和寺の花蔵院の宮と
くもおいりしきうまいして御くうたりあく

しに母も大臣の右のおとしのごさりうて
しこの宰相とゆかしのかしむまて少人やく
六条殿とう寺寺ぬく後了ハの家の氏
部てまておもりくろとるやはま家いつくしくる女
しそよ人へときて給きも尾の宮如きを
ひき汶之井寺の大僧正初恭とあさし
あひしこもおりしき大備中守改もときて
しん共世てめのとくりおりひこまも恭
言よくうしひさ宮へろたうへしこ共院
もこの僧正りうおこたしひのしとうきさ

きはときこえし法性寺殿おほく御く
しおほしけし陽くにの御所にし給と筆
まゐらしさここしの僧正をも申たまへし
天王寺へまいりて西門の額まゐらせられけるは
なをきゝ給ひて
ゆふく違りつるはいつもとみなさせ
入あしくもとのあてなりける
とうなきてしこそこゝろえ文へのいろ
こゝろとゞまりけるのありてと見しきを
かくしきこえし給ひたまへかまのうとゝこ文

くまのあしてゝりうかろも處さしとまことに
えたり文若御前法眼ときこえし人まへ
つましとも白河院殿御みすやおほりてんこ
ちのおもてのうちに宗とつかしかむまとめの
らくりおりもとくかうそうのみの乃かしの
らやうらはやまのうし法皇なるときてし給
後了は庭をみすりて執をのさんしふ
乃ちく庭ともと末こしき伊房等時経
そく傳の大納言なんとをもきこえし
むまやのつらゝ人そこくまろとく文仁和

寺の花蔵院法印大僧正にてましいおやのうちと
陰家と申せしひとのむすめのちとせまいらせて給
し僧正御房のしつこゝろのまてとおもひけれ
しこゝろと申し見あそはされ
又月日のひまなきに法印さまはいらせしは
やともあつしもくらなきなれ
ところにて修し身としろしめされは
もろともにめしはなりしや御子ともてなされひ
こゝろひたしといとあはれきこし給ひ
女房は九条の新院ときこえし給ひおり
まやうくの大政大臣女房のうち見さく
まうまうちとうらん又内大臣新家と
かつて川の法印御むすめ也と申させ給はさく
これらもおのとなるへしとての法の
家は女院てとこ給はんすくなきれ
かりし三井寺の六の宮の七家さく
おつしまとなられもせんすて候なつ
きとらんききてまうりとし法印
摂録寺の南にてむかしつて給ふ又清
法印といひ申れ別当の息女となん

小侍従なとまうしけるは小大進かむすめなり
くこゑはかきたんてくうるかて白河院
歌も御時よりちくさねかひて鳥羽院
御子あまたおほしましたるなりしまさ
うれあるしたしありあやにおとききてさを
うたかよしおそくて雙林寺なるとて流れを
つきのとなりける寺の文はむとしきこゑよ
きやまのはてはなかりけり郭公まてあり
にとうの文峯おの中ねある設ときこえて
御むまや待賢門院流しおかりつゝなりとは流れの

れなうてまうろまへつりし吉田の歌さ
とりしかきもしきさかくは九年みちやか
てまつりぬれんおほまりなりをさかくちさ
うくそしくさきてはきさきき共してかん
母なりといおさましうきをきみかから
かれうことありしとうつきしかこうちあとこの
いうなるこしのあらるみかうしうひなるを
あるこころおやもはこつゝややこみなさ
またさうまの文は大寺のたのあとのはむとを
代ときくそしの女院より作給なりも女こそ

うせ給ふすかのひめきみときこえしたまふ
冷泉の姫宮と申すハやかのたくさとうす
か殿と申たてまつりし又せか院の姫宮ハ故
院の姫宮あまたおはしけるなかにさき姫も
おはしましたりけるし鳥羽院の宮たち
ハおやこ女房さへにてもちのたましを
くらくそえらるおもしこ宮八人もゆかり
女宮ハ九人かかおはしましてたらくし
さぬきの院あまた一のみここやまひし
ハ重仁親王と申しきこえしその御母

院ありしにさふらひてこそおはしけるを
あまたへまゐりけるなときこえし給ひこ
しくら井ありおはしまし、よきさいの
宮一の人きむすめとあそておはしましけり
うちの女房まうくるのにハ母もやつしの人あまた
ありけるハ給ひけるそのかたしよおさめ給
しけれハきさいのおもしろのへにやさまり
宮おりハおほむく人の心その見たてまつら
し世人もあまるまてゆるされておほえ
なかくしきつまとくいうしろのにたまふ

もおほせて大蔵卿行家ぞまゐりし
せちなりけるならひとも見えけれはまた
もてしをつかはしけるをなきことをおもや
なましひに今来作るにつきやしけり
もつまなきしさるべきこゝろのまゝ
ことのおやいたくこそいあしてひしさ
あつの事さぶらひしゐたりて白にむいけ
寺のつきさなりけるうちきこゑ給はく
とくへりそうもうちをきゝ人ぞいこるを
宮まとおしこそて◯そこひきうらへしつ

ねかひとてなかりの中ねうしてよ人の
とくにあるともめきそとめし給ふや
うつてもしつるてなんありすゞされと
さくゑなおれうて須さしときらひてよりす
まても見し給ひしてありおのこきこえてて
し場つきて中宮まいりいてくろしもな
きかりしとめうしくいてとやまうしねつまゐる
みしきおりちの一院もきゝを給てむくより
給へ女院のはうくわり尾うひやさを給や
うしうちのゆめのとこのよろきまめうとく

すのこにさふらひて人ともの墨やつれたるな
との女房たちもしものまとゐもあり
ひさしくきこえけるかりてはかなき
つまこゑありけれはめのと刑部卿つひく
大貮のめのとのおとこときこゆみこも
親王の宣旨かうふりてさへ服なと
きぬきかへなとし月ことにさせ給ふ
おほやけ位をさへ給へ親王なとおほし
ましてみともよからぬにひかへてましてさを
くさへたまきさの大宮殿のなにとかはゝかる

そうしおほかたおほしましゝ院の
れいのたましひはいとかしこうさせ給ひ
ちゝ中宮殿のおほえとりて世中をさ
おしなへておほくおほしまさしや
うたゝあつきこともさくしものにおほえ
つましさを給ひはなさせ給めるの
ちよの中をまもりもてきこえめさへそと
もおほしなしめつゝやかて御母よ法し
そらきよつくりの国の年をへてひき
一のみこもたちおろしのゝちく仁和寺

大僧正寛暁と申しゝはみつゝさ給ふまい言
なとし申しき給へりけるとめてそゑ
おりはしましひとの真如法親王も
くやしみて給ふ給へりけれあしのやま
いおしうつき給ふひとさらせさを給
むまれけること二十二こりけやうき
帰りんさめ寺もはたなとおしあまりけり
やはなやこはまうくつまそてしさき給
みつはうやなむにこそものとり給ひし
らとおもへく醍醐のさとしのこと

寺のわたりにすまゐ給ひけるの院ちかく
みかひなきはいてしうもやすらくもなと
しをいとらしおつきくよるに給へ道のかり給へく
つまゐりあらんのと物しひやしろ菩薩は
きうこなくてくるはちりきり道にし
みりしと人なれおもひ尾しあん
とろくつまゐるらんさらそてつとうるを
なしるしまさくつまし池の下おもしこや
なれ仁和寺の家おりましおしいと物う
しを給ときこしめこやもうきね給へんを

ゐしをおもひ居りきそゆつゝわすらるなき人
しきしきくおもひまうしたるゝ人君
まうて京よりおりしゝの白河のいきとの
とふ人もなきつねとてごらんをよみや
ひとりきはまゝうまて見る道そまうりて
おりしくみてくきはつきさらきくれ
となん

なとしくとゝ河を来つ道の色との月さ水も
人まちゝは見てゝすれともまたを
とれてまし締し又さめくよの流の道みいう

又も仁和寺の宮やまりおはしましゝひたすら法
師になりうしきの人々ゆるしゆかしさせのつゝう
又も中言上すまつりをゆくつとめたこ
なもをしくまゝりしらく上西門院やみみせ
させくもくゝらうこの御母も隠くらの大弐
つのまりし参てゆ給ゆるそゆし人ゝおりしらう
むしそめのさ御まへのゆらしゝのゆしよまう
かんそまうりくゆのましつゝことむゆそのへゝ
とりまゐらしゆきれさめつまみゆ給きゝう
まゆさゝくつとくるこゆゆたてひつゝさて

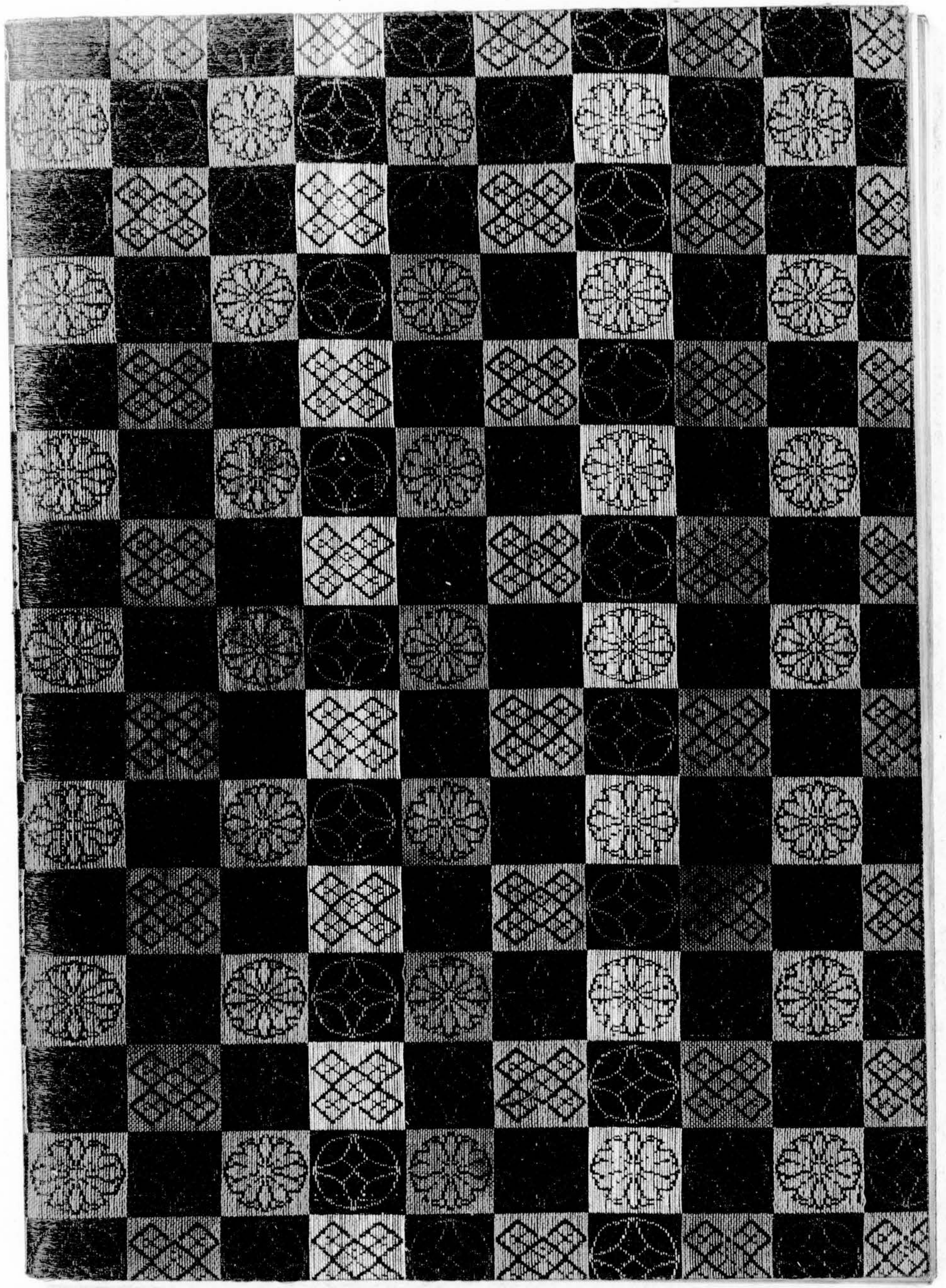
よろこびを宣らせまゐらせてゆかりをたづねく
つま宰相は
　くまぢしらの松山君ひこて見よかし
　こしひろうちの夜とはきこゆ
とよめるあへつまかりてありけるかのしたる
まちこれあとこうひなそくやむごとなきかたひ
なかりけりしも人しれぬ御君なりとしを
むあはれとて人めをまつ山なかなり
　夜ひとそしやまふりあつうとききく
心をあはれふたり山君なり

中しまにせめくだりてさまざまに思しけむ
しの風吹つくへきを給ひて御さしぐし女
家なをありしゆかりをたづねていま君一流の
こやこらはあまりておゆるりと沙しきこさ
きこしのありけりはいろいろの二位殿
なりけれ服ありし仁和寺のこやれむろはしく
くおぼしまうとあらまじくおぼしまし給
み法あつこうひのいとも梵字なうてもよろしく
しを給へ身をしさを給ひつまよれ元服を
給ひさるかへるおりしまきてうらむもかへしも

くつさいしを給はりくだされてしうしを給しゆへし
さきを給ふの文もうやまうしまいらせ候さ
うる人へとこそおもひし二位殿にてとしよ女
文もおもしきれりまひなるへし侍そのい
はゐりして婦人（うやいおもしろき）おもしとおりしますと存
さし候を給しおもしとの文は六条院の
きみし尼しなしもりてう院はる
あくおいしまいとして存さし候を給
又かく庭のいはきつあとれてまいらする
まうく女房の候ゝいし給なし給にあわし

まいらせゑをしのねしうろきさしてまゐ
とのえうめもうやまらおもふてれくし
ましとたてうちし二井寺よは下候給
ちうも方さしさを給ますに女房三位たれ
御こしおもてまいらいておもいいのくしのた
またおもへのにむにてあまうも御文ら
てまうらゝ御つうおもしまいとをきて給
又さしてうしのうらやくもあまて御し
またなかちし　二条のこし心の文ろ
もおもしこ二女文まいらせしを給へまいらせて

女こやしなひ女房くしてまいり
しるくるしさうしのさうしを
まいらせてあいしまたなりたまこ
ころは源氏のしまのせとをさりつゝ
まゐのこりおいしまにすゝやかし
給ひて法寺のみしのつじまとあめつゝ
こゝきよし給はくる井さうさを道へて
しのきけり給ひてじのあこの
みあしこそりありけうつらしみさく
まゐらせまゐるありしまもとやすしさきた

まかくすまのよのしと申しつゝ言すれ
いとしあてこそいさゝくをたへる
あきうれし

九州大學圖書印